

高松市中央卸売市場における主要6魚種の取り扱い割合

山本昌幸

Ratio of catches of the six commercially important species in Kagawa Prefecture handled by Takamatsu City Central Wholesale Market

Masayuki YAMAMOTO

キーワード：アナゴ、エビ類、スズキ、タイ、タチウオ、瀬戸内海

水産資源を効率よく利用するために最も重要な情報は漁獲量である。公式な漁獲量は農林水産省の海面漁業生産統計調査であるが、2007年以降、取り扱い種数が大きく減少した¹⁾。さらに、このデータの公表までには1年以上のタイムラグがある。一般に公開されたデータから香川県の各魚種の漁獲量を推定するには、高松中央卸売市場の統計データに基づく方法が考えられる。しかしながら、高松中央卸売市場が香川県の漁獲量の何割程度を取り扱っているかという知見がないため、高松中央卸売市場の取扱量を漁獲量推定に用いることができない。本研究では、高松中央卸売市場におけるマアナゴ *Conger myriaster*, タチウオ *Trichiurus japonicus*, マダイ *Pagrus major*, クロダイ *Acanthopagrus schlegelii*, スズキ *Lateolabrax japonicus*, 小エビ類 (主にサルエビ *Trachysalambria curvirostris*, アカエビ *Metapenaeopsis barbaraz*, トラエビ *M. acclivis acclivis*), それぞれの取扱量の香川県漁獲量に占める割合を調べた。

材料と方法

1985–2018年における高松市中央卸売場年報^{2,3)}と香川県農林水産統計年報¹⁾からマアナゴ、タチウオ、マダイ、クロダイ、スズキ、小エビ類、それぞれの取扱量と漁獲量に基づき、種ごとの両者のピアソンの相関係数と取り扱い割合 (取扱量/漁獲量×100, %) を算出した。

結果と考察

1985–2018年 (34年間) におけるマアナゴの漁獲量と取扱量は、それぞれ58–681tと12–220tとなり、両者ともに1992年が最も高く、2018年が最も低くなった (図1)。両者ともに1980年代後半から1990年代前半に高く、その後、減少傾向に転じた。漁獲量と取扱量の相関係数は0.94となり、1%水準で有意な正の相関が認められた。取り扱い割合の平均は37.1%となった。1985–2015年の取り扱い割合は30–52%で変動していたが、2016–2018年は21–23%と低めに推移していた。

タチウオの漁獲量と取扱量は、それぞれ16–559tと6–129tとなり、両者ともに1985年が最も低くなったが、最も高くなったのは漁獲量が1991年、取扱量が1993年であった (図1)。相関係数は0.70となり、1%水準で有意な正の相関が認められた。取り扱い割合の平均は37.4%となった。取り扱い割合の変動は9–65%と大きいものの、2010年以降は28–50%と変動幅が狭くなった。

マダイの漁獲量と取扱量は、それぞれ46–473tと24–378tとなった (図1)。漁獲量と取扱量が最も高くなったのはそれぞれ2010年と2018年、最も低くなったのは1990年と1985年であった。相関係数は0.90となり、1%水準で有意な正の相関が認められた。取り扱い割合の平均は56.8%となった。2001–2018年に取り扱い割合が増加傾向にあった。

クロダイの漁獲量と取扱量は、それぞれ156–423tと38–169tとなった (図1)。漁獲量と取扱量が最も高くなったのはそれぞれ1985年と1987年、最も低くなったのは2014年と2016年であった。相関係数は0.81とな

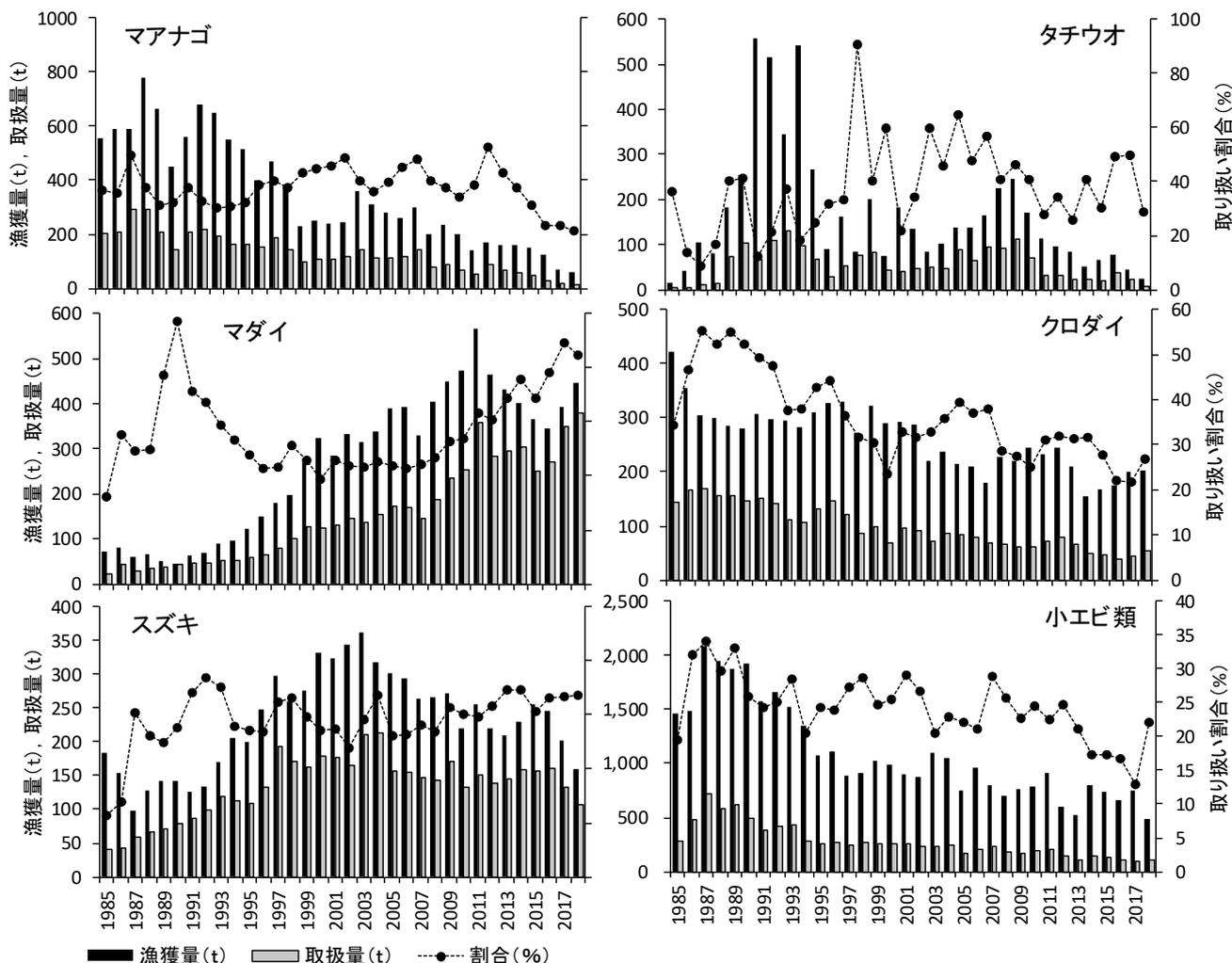


図1. 1985-2018年における6種の香川県の漁獲量と高松中央卸売市場の取扱量，取扱量の漁獲量に占める割合。

り，1%水準で有意な正の相関が認められた。取り扱い割合の平均は36.2%となり，1987年に55%であった取り扱い割合は，2015-2018年には22-28%と半分程度にまで低下した。クロダイの漁獲量，取扱量，取り扱い割合は，マダイと逆の傾向にあった。高松中央卸売市場におけるクロダイの単価は，鮮魚自体の漁獲の低迷やマダイの取扱量の増加などによって，1985年の810円/kg²から2019年には331円/kg³にまで落ち込んだ。クロダイの取り扱い割合の低下は，単価低迷によって各漁業協同組合から直接水産加工業者へ出荷する割合が増えたことが一つの原因であると考えられる。

スズキの漁獲量と取扱量は，それぞれ97-362tと42-213tとなった（図1）。漁獲量と取扱量が最も高くなったのはそれぞれ2003年と2004年，最も低くなったのは1987年と1985年であった。相関係数は0.88となり，1%水準で有意な正の相関が認められた。取り扱い割合の平均は58.1%となった。1990年以降，大部分の取

り扱い割合は54-74%と，比較的，安定していた。

小エビ類の漁獲量と取扱量は，それぞれ489-2,091tと96-714tとなった（図1）。漁獲量と取扱量が最も高くなったのは1987年，最も低くなったのはそれぞれ2018年と2017年であった。相関係数は0.94となり，1%水準で有意な正の相関が認められた。取り扱い割合の平均は24.3%となった。

文 献

- 1) 中国四国農政局1987-2020，香川県農林水産統計年報.
- 2) 高松市：1986-2008，高松市中央卸売場年報. 高松市，高松.
- 3) 高松市：2009-2019，高松市中央卸売場年報. <http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/kurashi/kurashi/shisetsu/chuoichiba/tokei/index.html>

要 旨

1985-2018年におけるマアナゴ、タチウオ、マダイ、クロダイ、スズキ、小エビ類の高松市中央卸売場年報の取扱量と種ごとの取り扱い割合（取扱量/漁獲量×100，%）を調べた。6種すべて漁獲量と正の有意な相関が認められた。マアナゴの取扱量は12-220tとなり、取り扱い割合の平均は37.1%となった。タチウオの取扱量と平均取り扱い割合はそれぞれ6-129tと37.4%となった。マダイの取扱量と平均取り扱い割合は24-378tと56.8%となった。クロダイの取扱量と平均取り扱い割合は38-169tと36.2%となった。スズキの取扱量と平均取り扱い割合は42-213tと58.1%となった。小エビ類の取扱量と平均取り扱い割合は96-714tと24.3%となった。